

参考文献・資料

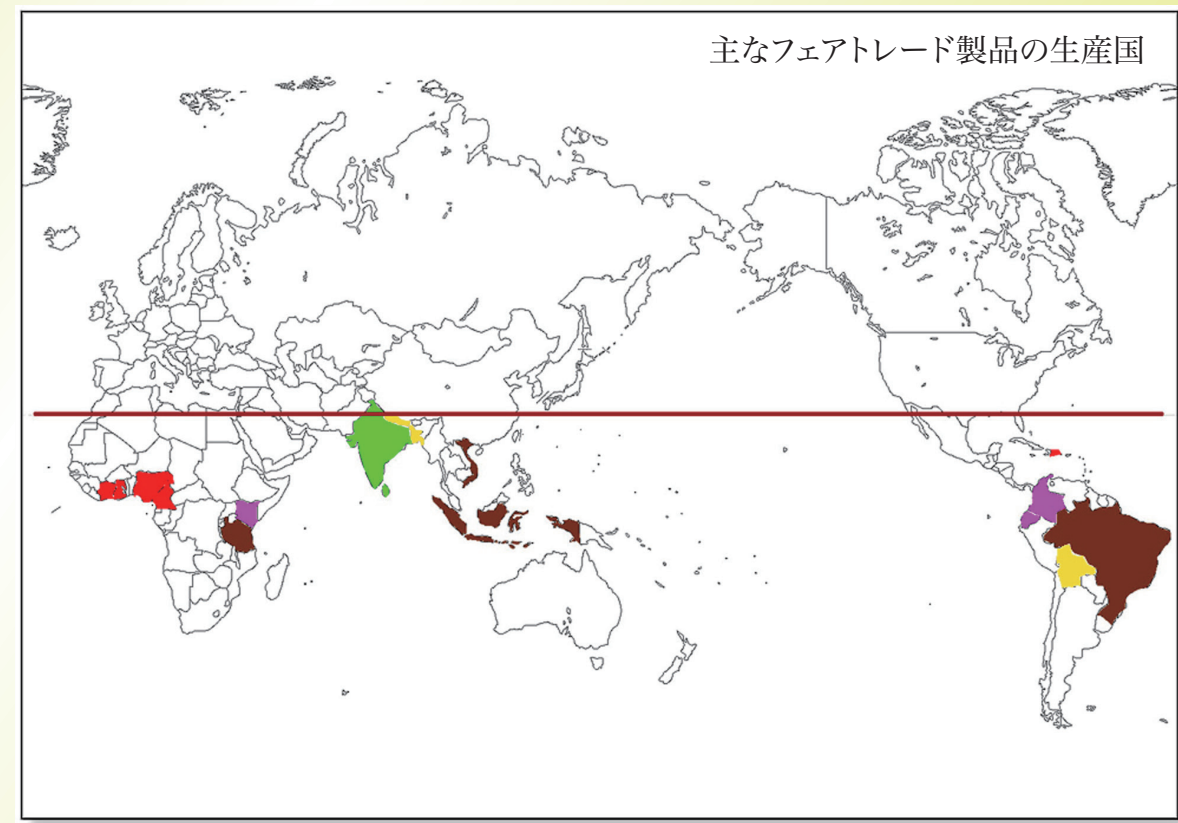
- ・長尾 弥生 (2008)『フェアトレードの時代』コープ出版
- ・佐藤 寛(編集)『フェアトレードを学ぶ人のために』世界思想社
- ・FLO (編集),NEWS! (編集),IFAT (編集),EFTA (編集),北澤 肯 (翻訳), フェアトレード・リソースセンター (翻訳) (2008)『これでわかるフェアトレードハンドブックー世界を幸せにするしくみ』合同出版
- ・FLO Fairtrade International <<http://www.fairtrade.net/>> (2014/1)
- ・WFTO World Fair Trade Organization <<http://www.wfto.com/>> (2014/1)
- ・EFTA European Fair Trade Association <<http://www.eftafairtrade.org/>> (2014/1)
- ・フェアトレードラベルジャパン <<http://www.fairtrade-jp.org/>> (2014/1)
- ・一般社団法人わかちあいプロジェクト(国際協力NGO) <<http://www.wakachiai.com/>> (2014/1)
- ・Fair trade Style <<http://fairtrade-net.org/>> (2014/1)
- ・フェアトレードとエコ関連情報 フェアトレード情報室にゆうす <<http://blog.livedoor.jp/fwinds/archives/50557919.html>> (2014/1)
- ・スターバックスコーヒージャパン株式会社 「フェアトレードコーヒーの日」 <http://www.starbucks.co.jp/csr/ethicalsourcing/fairtrade_coffee_day.html> (2014/1)
- ・Asante sana 第3世界ショップ <<http://www.p-alt.co.jp/asante/>> (2014/2)



金城学院大学生活環境学部 丸山千賀子ゼミ
製作 高木 彩花・水谷 真夕・齋藤 楓(2014年 2月)
(名古屋市「大学等への消費者啓発委託事業」)

わたしたちのくらしと

フェアトレード



- カカオ
- コーヒー
- 縫製品・麻製品
- 花
- 茶葉

目次

- | | | |
|---|----------------------|---|
| 1 | フェアトレードとは? | 2 |
| 2 | フェアトレードの歴史 | 4 |
| 3 | 国際フェアトレード認証ラベル | 5 |
| 4 | フェアトレードの問題点 | 6 |
| 5 | フェアトレードを企業の戦略にしないために | 7 |

フェアトレードとは？

現代の日本ではあらゆる商品が手に入ります。その商品の中には日本で材料の調達ができないものや、日本よりも生産コストが安い海外から輸入しているものがあります。

たとえば、チョコレートの原材料カカオは日本で採れません。毎日のように飲むコーヒーも豆を生産しているのは海外です。衣料品や雑貨類から食品に至るまで海外製のものが溢れており、そのどれもが低価格で手に入ります。

このように私たちの暮らしは国際貿易によって支えられています。

ところが、私たちの暮らしを豊かにしてくれる国際貿易が不公平な取引や発展途上国の劣悪な労働環境を生み出している現実をご存知でしょうか。

たとえば、カカオはその7割が西アフリカのカカオ農園で生産されていますが、そこで働くのは主に14歳以下の子どもたちです。人身売買や強制労働者として連れてこられた子どもたちは、チョコレートがどんなものかも知りません。

また、コーヒーの場合は先進国の巨大企業がコーヒーの価格を調整して莫大な利益を得ていますが、エチオピアに住む生産者のひとりが受け取るお金はコーヒー豆1kgあたり85セント^{*}ほどなのです。



*1ドル=100セント

国際貿易の不公平な現実

国際貿易の不公平は、先進国と途上国との間に大きな経済格差があることから生じています。経済力のある先進国はWTO（世界貿易機関）などでの発言力があり、「援助」と引き換えに自分たちに都合のよい貿易ルールを作ってしまうことがあります。また先進国の大企業は、原材料の価格を自分たちでコントロールすることもできます。

このように、経済基盤の弱い途上国は、はじめから不公平な取引を強いられているのです。

新しい形の貿易

このような不公平を是正するため、発展途上国で作られた作物や製品を適正な価格で継続的に取引することによって、生産者の持続的な生活向上を支える仕組みが考えられました。それがフェアトレード（公平貿易）です。

これまで先進国が行ってきた一方的な資金援助には、援助する側の都合によって左右され、継続性に欠けるといった問題点がありました。また、援助活動によって途上国の人々が働く意欲を失うなど、自立を阻む原因ともなっています。

それに対し、フェアトレードは、私たち消費者が自分の気に入った商品とその生産コストに見合った価格で購入することで実現できる身近な国際協力なのです。この方法なら単なる「援助」ではなく、「対等な立場」で自立を継続的にサポートすることができます。

カカオやコーヒーのように、すでに貿易に参加している生産者にはフェアな参加ができるように、農村部の人々・女性・少数民族・障がい者などには生産活動を通じて経済的な自立ができるように促すのがフェアトレードの趣旨です。

フェアトレード運動は、ヨーロッパを中心に1960年代から本格的に広まり、現在では数千店舗の「第3世界ショップ^{*}」が世界中に開かれています。日本でもフェアトレードに取り組む団体やフェアトレード商品を扱う店が増えてきています。

フェアトレード商品を購入することで、私たち誰もが開発途上国の人々を支える社会貢献に参加出来るのです。

*フェアトレード事業を行う「第3世界ショップ」は、「飲むなら途上国のコーヒーを」というスローガンを掲げて1986年にスタートしました。



2 フェアトレードの歴史

フェアトレードの始まり

1946年にアメリカのキリスト教系NGOが、プエルトリコ人女性の創った刺繍を売って歩いた事がフェアトレードのはじまりといわれています。当時はチャリティの要素が強く、貧困に苦しむ人たちを助けるために手工芸品を買い取り、自国で販売するというものでした。

1960年代には援助から自立を促す形へと変わり、現在のようなフェアトレードの形態になりました。交渉力を強めたり、共同で物資を購入してコストを下げたりするために協同組合をつくりました。また、リーダーシップや会計について学び、自分たちで有利な貿易を行えるようになってきました。

1980年代には製品の品質が向上しました。1990年代にはフェアトレード商品であることがわかりやすいように、多くの企業がフェアトレード・ラベルを利用しはじめました。このフェアトレード・ラベルによってフェアトレードの認知度が高まりました。

日本におけるフェアトレード

日本では、1974年に国際NGO団体シャプラニールが、バングラディッシュでの戦後の復興支援の一環として、女性の手工芸品を販売するための生産協同組合をつくり、日本国内で販売したことがフェアトレードのはじまりでした。

1986年にはヨーロッパのフェアトレード商品を輸入して販売する「第3世界ショップ」が誕生しました。1980年代前半にはフィリピンのネグロス島の特産品である砂糖の市場価格暴落によって飢饉がおこり、その救済活動を行っていた日本のNGOが、1989年に株式会社オルター・トレード・ジャパンを設立しました。オルター・トレード・ジャパンは、ネグロス島の生産者たちから“生活できる価格”で砂糖を買い取り、販売しました。

近年では2002年から大手コーヒーチェーンが、2003年から大手スーパーがフェアトレードのコーヒーを販売しています。

しかし、日本におけるフェアトレードの認知度は、欧米に比べてまだまだ低いのが現状です。



3 国際フェアトレード認証ラベル

フェアトレードで扱われる商品は多岐にわたります。また、それらは主に南半球の国々を中心として生産されています。

主な認証製品 (出典:フェアトレードラベルジャパン webサイト)			
コーヒー 	紅茶 	カカオ製品 	スパイス・ハーブ
果物 	加工果物 	ワイン 	オイルシード 油脂果実
食品その他 	切花 	コットン製品 	食品以外 その他



® フェアトレード商品には、このようなマークがついているものが多くあります。これは、国際フェアトレード・ラベル機構(FLO)が定めた「国際フェアトレード認証ラベル」と呼ばれるものです。

このラベルは、その商品の原料が生産されてから、輸出入・加工・製造工程を経て「フェアトレード認証製品」として完成品になるまでの全過程で国際フェアトレード・ラベル基準が守られていることを証明しています。

この基準には経済的基準、社会的基準、環境的基準があり、生産者や労働者の賃金、労働環境に加え、農薬、薬品の規定、遺伝子組みかえの禁止などの安全も保障する基準内容となっています。

経済的基準

賃金
労働環境
安全を保証



社会的基準

環境的基準

4 フェアトレードの問題点

フェアトレード商品の価格

フェアトレード商品の値段は普通の商品に比べて高い傾向がありますが、それには理由があります。

一般商品	フェアトレード商品
 60グラム 100円前後	 50グラム 315円!!

1 生産者に適正な賃金を支払うため

輸入の際に安く買ったたくのではなく、時間と手間をかけて原料や製品を生産してくれた人に適正な賃金を支払っているため、もとの値段が高くなります。

2 時間と手間

生産規模が小さく、技術的に未熟であるため、時間と手間がかかります。その他、例えばオーガニックコットンを栽培する際、除草剤、化学肥料、収穫をしやすくするための枯葉剤を使わない代わりに、害虫駆除にはテントウム虫、収穫する時は自然に枯れるのを待つか1つ1つ手で摘み取られていることなども理由としてあげられます。



3 生産調整の難しさ

農産物の場合は天候が生産に大きく影響するため、国や業界のサポートを得ないで生産するには大きなリスクがあります。フェアトレードでは、天災、異常気象、価格の暴落というリスクを資金力の乏しいフェアトレード団体と消費者で負担しないとイケないため、価格が通常の製品より割高になります。

4 輸送コスト

フェアトレード商品は海外から輸入しているという点で輸送コストがかかります。さらにフェアトレード商品がまだ日本でそれほど流通していないことや、商品の性質上からも大量輸入が出来ないため、輸入コストが割高になってしまうのです。

品質の問題

フェアトレード商品を生産している国では生産技術が未熟であり、生産団体の規模も小さくてチェック体制がうまく働かないため、品質には問題のあるものもあります。

品質基準が厳しい日本に比べ、途上国の品質基準では、なかなか一定レベルの商品が作れません。縫製品を作る際なども「平行」や「直角」の概念がないため、技術指導も大変なのです。

現地の経済状況や労働環境も影響しています。24時間いつでも明るい照明が使える日本と違って、停電があったり暗い照明のもとで作業をしなければならなかったりするため、糸や布地のシミなどに気づかないこともあります。

しかし品質が良くないと結果的には売れません。フェアトレードは「援助」ではないので商品が正しく評価され売れないと意味がないのです。そのため品質管理のレベルを少しずつ上げています。

また最初は発注通りのものしか作れなかった人たちも積極的に参加するようになり、商品デザインや検品も自分たちでできるようになってきています。



5 フェアトレードを企業の戦略にしないために

消費行動が社会を変える

このように社会貢献に役立っているフェアトレードですが、その認知度が高まるとともに、大企業の参入が増え、「企業が儲けを得るためのフェアトレード」が出てくるようになりました。残念ながらフェアトレード商品を扱っていることをアピールし、イメージアップのために利用している企業もあります。しかし、最初はイメージアップのためであっても、私たち消費者が進んでフェアトレード商品を購入するようになれば、企業はフェアトレード商品をもっと仕入れ、販売するようになるでしょう。そうなればフェアトレード本来の目的は達成されるようになります。最終的にフェアトレードを普及させるか否かは消費者にかかっているのです。

私たち消費者には社会を変える力があります。私たちがよく考えてものやサービスを購入することこそが大切なのです。安さだけを求めるのではなく、価格の先にある背景、そして買い物で私たちにできることを考えることが大切なのです。

